
遥かなる時空の中で～旅の始まり～

詩華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遙かなる時空の中で〜旅の始まり〜

【Nコード】

N10060

【作者名】

詩華

【あらすじ】

大昔、心に大きな傷痕ができてしまい、全ての種族（天使、悪魔、人間など）を信じられなくなってしまった水木志穂……そのせいで、彼女は自らの記憶も忘れ、心も閉ざしてしまう……だが……多くの出会い……多くの旅が、水木志穂を変える

この話は、ほとんどがオリジナルストーリーです??

初心者なので、誤字が多くあったり、キャラが違ったりすると思います（・ω・;）（;・ω・）

なので、それが嫌なひとは引き返すことをオススメします（・ω・；
）（；・ω・）

主人公の紹介は、主人公の過去が終わったあとに書く予定です（≥
≡）b

序章 プロローグ

…あの日から…

…誰も…

…信じないと…

…誓ったんだ…

…だから…

…期待も…

…しないと…

…誓ったんだ…

…あの日から…

（??? ??? ??? 年前）

？「…志穂、お前の婚約者が決まったぞ」

志穂と呼ばれた少女……………水木志穂は、驚いて父…水木狩野の方へ振り向いた。

志穂「えっ!？。お父さん、なにいつてるのよ!？。婚約者って…私、まだ5歳だよ!？」

狩野「なにいつてるんだ志穂。お前は世界再生の神子として選ばれたんだぞ!。婚約者を、早めに決めるのは当然だろう。それに、お前は俺たちの子供だ。

早めに婚約者を探して、早めに結婚をさせるのが、俺たち親の役目だ（へい）」

狩野は、当然といった態度で言った。

志穂「あのねえ」

困った表情で、志穂はなにか言おうとしたが…

？「…ごめんね、志穂。お父さん…あなたが神子に選ばれた途端に、早く婚約者を探そうなんて言って、あなたが神子に選ばれた時から、

今日まで、ずっと婚約者を探して、漸く見つかったのよ。だから、あまりにも嬉しくて、お父さんは興奮してるのよ」

母：志乃も、嬉しいような困ったような表情で、そう言った

志穂「でも、お母さん…」

狩野「しのごの言う前に、まず婚約者と会ってみろ。お前と、同年だぞ」

志穂「（私と同年の子を、よく探せたよね）」

志穂は、少し複雑な感じで思った

志穂「……わかったよ。会えばいいんでしょ…。っで、その婚約者は、今、何処に居るの？」

狩野「流石は、俺たちの子だ。お前が、そう言ってくれると思って、もう婚約者なら連れてきてるぞ」

狩野は、嬉しそうに言った

狩野「さあ、入って良いぞ」

狩野は、そう言って後ろのドアを開けた
すると、一人の少年が入ってきた

？「…初めまして、天野狩闇です。よろしく願います志穂さん」

その少年は、志穂に自己紹介をして、志穂に優しく笑顔を見せた

志穂「こ、此方こそよろしくね狩闇くん」

志穂は少し戸惑ったが、何とか体制を立て直して、志穂も挨拶をする

志穂「私の名前、知ってたんだね」

狩闇「はい。志穂さんはもう、世界中有名ですから」

志穂「あゝ、神子に選ばれたからだよね（・ω・；）（；・ω・）。

自分じゃあ、まだ自覚はないんだけどな（・ω・；）（；・ω・）」

狩闇「それは、そうですよ。でも、これからじゃないですか」

狩闇は、笑顔で志穂にそう言った

志穂「ありがとう、狩闇くん」志穂は、そう言ってくれた狩闇に対して、笑顔でお礼を言った

志穂「あと…私のことは、志穂って呼び捨てにしてくれて、構わないよ。さん付けなんて慣れていないから。それと、話すのも敬語じ

やなくて良いよ」

志穂がそう言うとき：

狩闇「じゃあ、俺のことも狩闇って、呼んでくれ。」

志穂「うん…わかった。改めて、よろしくね狩闇」

狩闇「ああ、此方こそ改めて、よろしくな志穂」

志穂と狩闇は、そう言ってお互いに握手をした

狩野「(いい雰囲気だな)」

志乃「(ええ、狩闇くんを選んだのは、正解だったみたいね)」

狩野「(当たり前だ、俺が選んだ子だぞ)」

志乃「(ふふ、そうね)」

狩野と志乃は、二人でそう話していた

志穂「?。何二人で話してるの」

狩野、志乃「何でもないぞ(わ)」

二人揃って、そう言った

志穂「変な、お父さんたち…」

その時：

?「水木、入るぞ」

玄関から、男性の声が聞こえ足音が、近づいてくる

ガチャッ

そして、ドアが開いた

そこには、どこか威圧的で近寄りがたい男性が立っていた

狩野「おっ、来たか拓闇」

狩野が男性の名前を言うと、拓闇と呼ばれた男性は：

拓闇「天野…狩闇と水木志穂は？」

志乃「拓闇さん、狩闇くんと志穂はそこにいますよ」

志乃がそう言うと、拓闇は狩闇と志穂のほうを見た

拓闇「……………」

狩闇「…親父」

志穂「…えっ？」

狩闇は、拓闇のほうを見た途端…親父そう呟いた

志穂「……狩闇のお父さん？」

志穂がそう言うとき……

拓闇「……初めまして……だな。……天野拓闇だ」

志穂「あっ、初めまして……私は……」

志穂が名前を言おうとしたとき……

拓闇「……知っている。……水木志穂」

志穂「……えっ？。あっ、ああ、私が、神子に選ばれたから、知っているんですね？」

拓闇「……いや、お前が神子に選ばれる前から、俺はお前のことを知っている」

志穂「……」

志穂は、啞然としている

拓闇という男は、志穂が神子になる前から、知っていると言ったのだ……

志穂「……どうして」

拓闇「何故ならお前は」

拓闇が何か言おうとしたとき……

狩野「……お前が生まれたときから、拓闇はお前のことを知っているんだ。何故なら、拓闇と私は、古い親友なんだ」

狩野は、そう志穂に説明した

志穂「あっ、そうなんだ。だからなんですわね」

拓闇「……」拓闇は、狩野を睨みつけた

狩野は、嘘をついたのだ

拓闇が志穂にあることを、話させないために……

志穂は、もちろん気づいていない

狩闇「……あんた、何しに来たんだよ」

拓闇「何しに来たとは、酷い言われようだな……祝福に来てやったんだぞ？。私は、お前の父親……」

狩闇「俺は、あんたのことを父親なんて思ったことなんて、一度もない！。あんたのせいで、母さんは死んだんだ！！」

志穂「…狩闇」

志穂には、狩闇の苦しみをわかってあげることが、出来ない……何故なら、志穂には母親も父親も、両方いるからだ…

拓闇「……その事は、何度も言っただろう？。お前の母親は、我々を裏切ろうと……」

狩闇「母さんは、死ぬ前に話してくれた……あんたは、変わってしまっただと……そこにいる、志穂を初めて見てから、変わってしまったって」

志穂「…私を見てから？」

拓闇「……」

狩闇「だから、あんたには気をつけろって言われたんだよ……俺は、母さんを信じる……あんたの事は……信じない」

拓闇「……フツ、良いだろう。今日は帰ろう……狩闇、お前に話すことがある……今日は、私と一緒に帰ろう」

狩闇「………わかった」

狩闇は、仕方ないと思いながら返事をした

志穂「……狩闇」

狩闇「今日は、もう帰るな……また、明日会おうな」

志穂「……うん。約束……だよ？」

そう言って、志穂は右手の小指を出した。

狩闇「？」

志穂「指切りだよ」

狩闇「指切り？」

志穂「うん。約束をするときに、必ず指切りをするんだよ」

狩闇「そうなんだ」

そう言って、狩闇も右手の小指を出して、志穂の指に絡めた

志穂「指切りげんまん嘘ついたら針千本飲ます指来た」

そう言って、指を解いた

狩闇「針千本って」

志穂「ホントに、針千本を飲ますって意味じゃないんだよ。約束を

破ったら、罰を受けるんだよ」

狩闇「…似たような物じゃないか」

狩闇は、苦笑しながらそう言った

志穂「アハハ（笑）」

狩闇「……それじゃあ、もう行くな」

志穂「……うん、また明日…ね」

狩闇「ああ」

そう言って、二人は別れていった

このあと、悲劇が起きるとは志穂はまだ知らなかった……

序章 プロローグ（後書き）

良ければ、読んでくれたかたは感想をよろしくお願いいたします？
（＜―＞）

序章2 二人っきり（前書き）

短くてごめんなさい??

これから、もしかしたら短めで長くなるかも知れませんか??

序章2 二人っきり

狩闇Side

狩闇「(…何年ぶりだろうか…：親父とこうして帰るのは)」

ふと、狩闇はそんなことを考えていた

狩闇「(…確か、母さんが死ぬ前だ…：俺が、この世界の保育所に居たときだ…：2年前までは、普通に両親と保育所に向かってたんだ)」

狩闇は、そのことが頭に過り拓闇に聞いた

狩闇「…：親父。何で、母さんを殺したんだ!!」

拓闇「……………」

狩闇「…：2年前までは、あんなに楽しかったのに……………何で、あんたが母さんを殺したんだよ!!」

拓闇はそれでも黙りだった…

狩闇「……………」

だから狩闇も、拓闇が話すまで待った

……………

どれくらいたっただろう…

漸くたつて拓闇は…

拓闇「…：私は、あの女を利用するためだけに、近づいたに過ぎん…」

狩闇「!!!!」

拓闇「あの女は、水木志穂の母親の次に、天使を従うことのできる女だった……………だが、あの女は途中で私の考えていることがわかってな……………そんなことはやめてほしいと何度も言った……………邪魔になると思った私は、あの女を殺した…」

狩闇「その為……………その為だけに母さんを……………殺したって言うのか!!!!!!」

狩闇は、刀を手に取り拓闇に刃を剥けた

拓闇「……………狩闇。お前が私に勝てると思っているのか？」

狩闇「……………」

狩闇は、拓闇とは闘ったことはない……………だが、力の違いが歴然だと狩闇にもわかつている……………それでも……………

狩闇「わかつてるさ！！だが、それでも俺は、あんたと戦う！」

拓闇「……………」

拓闇は、じっと狩闇を見ている……………そして

拓闇「良いだろう。すぐに終わらせてやる……………」

狩闇は寒気を感じ、そして背中には冷や汗をかいていた

……………その時

ドカッ（拓闇が、狩闇を蹴っている）

狩闇「ガッ！！」

ドカッ、ドカッ、ドカッ

狩闇「カハッ！！！！」

ポタッ（狩闇の口から血が溢れる）

狩闇「く……………アッ……………」

意識が朦朧とする

拓闇の攻撃（蹴り）は、一撃一撃が重いのだ

拓闇「……………言っただろ。お前では、私には勝てん……………私の、スピードにもついてこれなかっただろう」

そしてまた拓闇は……………

ドカッ、ドカッ、ドカッ、ドカッ、ドカッ、ドカッ、ドカッ

狩闇「ガッ……………！！！！！！！！！！（悲鳴）」

ポタッ、ポタッ、ポタッ、ポタッ

拓闇「……………だが安心しろ……………お前は殺さん……………お前にもまた利用価値があるからな……………（フッ）」

そう聞こえたあとで、狩闇は意識を失った……………

志穂Side

狩闇が、家に帰ってもう3日も経っていた

志穂「狩闇……遅いなあ………約束……したのに」

ハァ（志穂のため息）

そして、父親も今日は出掛けていた…

志穂も着いてくると言ったが、母さんの事を頼んだと頼まれたので、家で待つこととなった……

…その時

？「お姉ちゃん!!」

後ろから声が聞こえ、振り返ってみると

志穂「志歩!!」

それは、ある時突然父が家に連れてきた妹……水木志歩だった

志歩「お姉ちゃん、どうしたの？」

志穂「何でもないよ志歩」
ニッコリ

志歩「良かった！お姉ちゃんが元気じゃないと、私も元気じゃなくなるんだからね!!」

志歩はそういった

志穂「えっ？、どうして私が元気じゃなかったら、志歩も元気じゃないの？」

志歩「だって、私とお姉ちゃんは、おんなじ名前なんだよ!!漢字は違うけど」

……水木志歩

その名前は、志穂自信が付けた名前だった

意味は、志を持っていつか自らの足で、未来を歩んでいてほしいという意味だった

志穂「そうだったね！ありがとう志歩！」

志歩「うん!!」

志穂は、実の妹のように……そして、志歩は実の姉のように慕っているのだ

志穂「そういえば、志歩。お母様は？」

志歩「お母様なら、出掛けていったよ」

志穂「……えっ」

…嫌な予感がした

志穂「ど、どこにいったかは、わからないの!？」

志歩「う、うん。すぐに戻るから心配は要らないって……」

志穂「そ、そっか。じゃ、じゃあ、大丈夫…だよ。お母様は、約束を破った事なんてないんだから」

そう、お母様は一度だって約束を破った事なんてないだから、すぐに帰って来るはずだ

……だが

志歩「お、お姉ちゃん。お母様が出掛けて、もう5時間も経っちゃったよ」

志歩は、今にも泣きそうな顔をした

志穂「だ、大丈夫よ。きつと、他にも用事ができたに決まってるわ」
それでも……何時間待っても……お母様は帰って来なかった

序章3 始まりの鐘が鳴り出す時…（前書き）

ごめんなさい??

久しぶりに書くので内容が、おかしくなってるかもしれません（・ω・;）（;・ω・）

ご了承下さい（・ω・;）（;・ω・）

序章3 始まりの鐘が鳴り出す時…

志穂Side

両親が出掛けてから、1日が経った…

その時志歩が

志歩「お姉ちゃん…町の様子を見てきたんだけど……」

志穂「どうだった？」

志歩「それが、人の気配が感じられないの…」

志穂「！！それって、私たち以外誰も居ないってこと！？」

志歩は、首を縦に振る

志穂「どうして……この世界に、いったい何が起きてるの？」

志穂の隣で、不安そうにみる志歩がいた

志歩「お姉ちゃん…」

志穂「大丈夫よ志歩…貴女は、何があっても私が守るから……」

志歩「うん……じゃあ、お姉ちゃんのことは、私が守るね」

志穂「ありがとう…志歩」

その時……

ドンドン（ドアが叩かれる音）

志穂「えっ？」

志歩「ど、どうして、町には誰も居なかったのに……」

志穂は思った。

敵が来たのだと……

志穂「志歩!!。こっちに逃げるよ!」

志歩「う、うん!!」

志歩を前に走らせ、志穂は家の鍵を嚴重に閉めた。

志穂「これで、一時は持つはず……」

志穂も、志歩が向かった方向に急ぐ

志穂「志歩!!」

志歩「お姉ちゃん!!良かった……」

志穂「ごめんね……」

志歩「お姉ちゃんが無事なら良いよ」

その時……

ドンッ、ドンッ、ドカッ!! (ドアが壊される音)
ダダダダダッ

志穂「!!!!!!もう、ドアが壊されたの!?!」

志歩「お、お姉ちゃん……外見て……」

志穂「!!!!!!」

外を見れば、もう家は囲まれていたのだ

多分、隠し通路も塞がれて居るだろう……

志歩「お姉ちゃん…お姉ちゃんは、ここから逃げて……」

志穂「!!!!!! 志歩…貴女何を言って……」

志歩「あの人たちは、多分お姉ちゃんを狙ってると思うの……」

志穂「…そうでしょうね」

志歩「だから、お姉ちゃんだけは……」

志穂「でも、だからって貴女を置いていくことなんて、出来るわけ
ないでしょ!?!。貴女は、私の家族よ!! そんな貴女を」

私は、涙が出そうになった

志歩「お姉ちゃん…私は、いつもお姉ちゃんに守られているばかり
だった……だから、今度は私が、お姉ちゃんを守るばんなの」

志穂「志歩……」

志歩「だから、守らせて……お姉ちゃんのことを」

志穂「ッ!!…ごめん!!!!!!」

そうして、志穂は志歩に背中を向けて、奥に走っていった……

志歩「ありがとう…お姉ちゃん……大好きだよ」

ダダダダダッ

志歩「……ここから先には、行かせないよ……」

志歩は、入ってきた人物たちにそう言った……

？「……………」

志穂「はぁ、はぁ、はぁ」

私は、懸命に走った……後ろを振り返ってしまえば志歩のところに戻って、助けに行ってしまうだろう……だから、後ろを振り返らず前に進み続けた

だけど……

志穂「何が、何が世界再生の巫女よ……妹も守れずに何が……
・こんなので世界を救うことなんてできるわけがないじゃない」

自分がどうしようもなく無力で……涙が出てしまう……

志穂「…………泣いてなんて……いられないんだよね」

涙を拭いて、目的の場所に全力で走った

? side

？「・・・漸くだ・・・全ての世界がようやく動き出す」

？「・・・そうだな、志穂も明日で6才だからな・・・これで、旅に出せるというものだ」

？「そうだな・・・今から5時間後にこいつを向かわせるか」

？「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

？「・・・・・・・・それより、そいつが連れてきた奴はどうする？」

？「あいつに対して、奴呼ばわりか・・・・・・・・そんな事を聞いたらあいつらが悲しむぞ」

？「あいつ・・・志歩に関してはないだろう・・・今、我々から逃げているあいつは悲しむかも知れんがな・・・・・・・・だが、あいつを悲しませること・・・あいつに怒りを宿すこと・・・それが我々の目的だろ？」

？「そうだな・・・我々の目的は世界再生の巫女・・・水木志穂は今はおよがせておきそして、怒りや悲しみを多く知った時に捕え、そして我々の目的のために利用し我々があの世界を手に入れるのだ！！」

？「我々は漸く動くことができる・・・」

？「私たちも、貴方様たちについていきます」

？「やっと、動けるんだね！・・・僕待ちくたびれたよ」

？「我々はどこまでも、貴方様たちについていきます・・・」

？「そして、この命も貴方様たちの物」

？「私たちは、私たちが求める世界を創るために・・・この命を貴方様たちに捧げます」

？「・・・よく言ってくれた！我が同胞たちよ！！」

？「だが、お前たちも死なせるわけにはいかない・・・お前達は、
我らの大切な仲間たちなのだから・・・」

？全「・・・もったいないお言葉」

・・・そして

ゴーンゴーンゴーン

始まりの鐘が鳴りだす

？「さあ・・・始まるぞ」

？「さあ行け・・・水木志穂に負の感情を持たせるのだ」

？「・・・はい」

そうして、男は外に出て行った

？「・・・あの男に行かせてよかったのですか？」

？「何か、問題があるか？」

ほとんどの同志たちが、不安のような顔をしている

？「だって、あいつはあんたに逆らったんだろ？・・・だから、今あいつを操っている」

？「そうだ・・・だから、問題は何もないだろ」

？「・・・我々が心配しているのはあの男が、貴方様の呪縛から抜け出し我々を裏切り水木志穂の味方をするのではないかと、心配しているのです」

？「その心配はない・・・何故なら、今のあの男には俺の呪縛を自力で抜け出せん・・・もし抜け出せたとしても、あることを吹き込めばまた我々の味方になるだろう・・・我々の味方に戻らなかったとしても、あいつは、志穂の味方をするのもできない」

？「自信があるのなら、このことはもうあんたには言わない・・・」

？「ただ、あの男の後を追わせてください・・・」

？「それは、いいんじゃないか？」

？「そうだな・・・しかし、お前達が全員行っても目立つ・・・追うのなら二人で行け」

？「じゃあ、俺と・・・」

？「はいはい、僕が行く！！」

？「お前がか？（汗）」

？「何だよ？・・・なにか文句あるのか」

？「・・・・・・・・別に構わんが、あまり騒ぐなよ」

そういつて、二人は出て行った

？「大丈夫でしょうか？（汗）」

？「・・・・・・・・大丈夫だろ・・・戦いはしそうだな」

？「戦ってもいいのですか？」

？「少しくらいなら構わん・・・・・・・・」

？「・・・・・・・・そうですか・・・・・・・・・・では、我々は命令があるままで待機をしています」

？「ああ」

そうして、この空間には二人しかいなくなった

？「・・・・・・・・・・本当に、行かせてよかったのか？」

？「お前も、不安なのか・・・」

？「まあな・・・・・・・・」

？「心配無い・・・・・・・・それにもし、あいつが自力で呪縛を解いたときはあの二人が何とかするだろう・・・・・・・・そして、呪縛を解いても激しい頭痛が襲ってくるようにしてある」

？「なるほど・・・なんだかんだで、あいつのことを認めてるとい
うことか」

？「何故、そう思う？」

？「だってそうだろ？・・・あんたも、あいつが呪縛を解くかもし
れないと思った・・・だから、念のために頭痛が起こるようにしてい
た」

？「・・・お前には敵わんな」

？「昔から、お前のことは知っているつもりだ」

？「・・・そうだったな・・・では、俺からは二つ聞こう・・・
水木志歩はどうするつもりだ？」

？「あいつも、利用すればいい」

？「・・・いいのか？」

？「構わんさ・・・志歩は、あいつのコピー人間だ・・・それに、利
用するただけに あいつは生まれたんだからな」

？「残酷な男だな・・・お前は・・・では、もう一つ・・・あの
女は殺さなくていいのか？」

？「あの女は、志穂のところに来るだろう・・・その時に、殺せば
いい」

？「そうか・・・わかった」

? 「もういいか？」

? 「ああ・・・では、我々も報告があるまで待機だな」

? 「ああ・・・俺達が表舞台に出るのはまだまだ先の話だからな・・・」

? 「予定より、早まるかも知れんがな」

? 「だが、あいつは今回でこの旅を成功させないとな・・・あいつのわがままでこの世界に限界が近づいてきているんだからな・・・」

? 「だが、それこそ俺達には都合がいいがな」

? 「ああ・・・では、私は先に戻っておくぞ」

そうして、俺の一番信じられる相手・・・男は出て行った

? 「・・・さて、水木志穂・・・俺達を楽しませてくれよ?・・・
・・・お前があんたの力を最大限に発揮することができれば・・・漸く俺達の願いが叶う・・・大昔に誓ったあの約束が」

・・・やっとな

? side

? 「（俺は・・・どこに向かっているんだ・・・あの男に・・・」

俺は何をされたんだ？．．．．．何も覚えていない．．．思い出せない．．．．．志穂．．俺、自分が怖いよ．．これから．俺は．．．なにか大変な事をしそうで．．君を傷つけそうで．．怖い．．．．．そういえば、あの男は何か言ってたような気がする．．．．．」

？「（怖いという気持ちがあった時は、大切なものを傷つければ怖いという感情は消えるだろう．．．だから．．．．．狩闖．．お前の大事な者．．．．．水木志穂を傷つけろ！！）」

狩闖「そうだ．．．志穂．．君を傷つければこの感情は消えるんだね．．．．．この怖いという感情は．．．．．志穂．．今から、君のもとに．．．．．（行くよ）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1006o/>

遥かなる時空の中で～旅の始まり～

2011年10月7日21時46分発行